

●3年生「英語超人Ⅲ」（学校設定科目）の授業で、題材はアメリカ・スタンフォード大学で出された課題を紹介したエッセー。次時以降に行う本文読解に向け、ペアワークを通して課題について自分のアイデアをまとめた。（P.29に授業デザインを掲載）

教科書の内容と関連した money, homework などの単語を英語で説明し、何の英単語かをあてるクイズをペアで行う。教科書の内容は、元手の5ドルで2時間以内にどれだけ稼げるかという課題に関するエッセー。本時の最後にはその課題について自分の考えをまとめるため、クイズは自分の言葉で説明するというウォーミングアップを兼ねている。

英語を使う必要感・有用感を重視した課題設定で生徒の主体性を引き出す

森先生のアクティブ・ラーニング

「実践的な英語力を育みたい」 その思いが授業改善の第一歩に

森一真先生は、以前から実践してきたアクティブ・ラーニングに、2015年度から本格的に取り組み始めた。

「伝えたい思いがあるから英語を学び、その延長線上に定期考査や大学入試がある……。そうした流れを目指して授業づくりをしていました」



大阪府立和泉高校

森 一真 もり・かずま

教職歴6年。同校に赴任して5年目。
3学年担任。生活指導部。英語科担当。
アクティブ・ラーニングの実践は5年目になる。

大阪府立和泉高校

◎郡立泉南高等女学校として開校。教育目標は「いかなる国際情勢でも生き抜く人材育成」。2013年度にグローバル科を設置し、14年度以降、大阪府教育委員会「骨太の英語力養成事業」の指定校。

◎設立 1901(明治34)年

◎形態 全日制/普通科・グローバル科/共学

◎生徒数 1学年約400人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、大阪大、大阪教育大、神戸大、和歌山大、大阪市立大、大阪府立大、奈良県立大などに67人が合格。私立大は、京都産業大、同志社大、同志社女子大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ823人が合格。

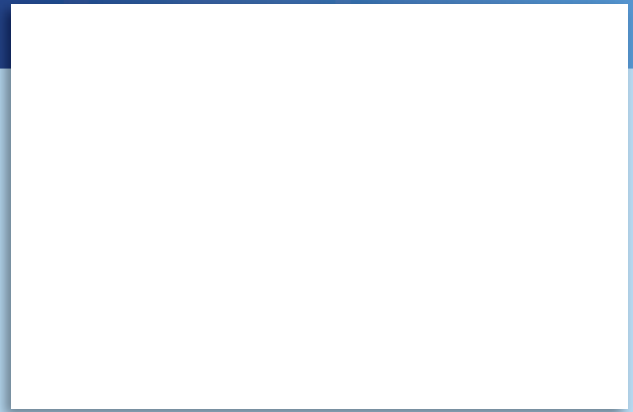
◎URL

<http://www.osaka-c.ed.jp/izumi/>



本文の要点をモニターに映し、空所を埋めながら内容を確認。続いて先生が「スタンフォード大学の学生と勝負しない?」と、授業後半に教科書本文にある課題に取り組むことを予告。

生徒の声 アウトプット中心なので英語力の伸びを実感できる上、文法についてもプリントできちんと学べるので安心です。



教科書本文への期待感を高めることをねらいとして、生徒が今までに経験した面白い宿題や課題について英語で発表させる。続いて、教科書本文の第1段落のみを印刷したプリントを配布。約1分間黙読した後、ペアでその内容を確認し合う。ここでは確実な理解を重視して、日本語で話し合わせた。

が、なかなか思うようにはできませんでした」

当時は、生徒にとつてペアワークの必然性が感じられない場面があった結果、生徒の学びが深まっていなかったり、筆記試験で高得点を挙げる生徒であっても実践的な英語を身につけていかなかったりしていた。また、大学入試に向けて、講義中心の指導をしていた時もあったと言う。

「これが自分の目指していた授業なのか」と悩みながらも試行錯誤を重ね、少しずつ今のスタイルを獲得していった。そして、15年度の1学年から、コミュニケーション重視の現在の授業スタイルを続けている。

「生徒に実践的な英語力を身につけてほしいといった思いから、いかに生徒を、英語を使いたいという気持ちにさせるか、いかにそうした場面を多く設けられるかを追究していったところ、自然と現在の授業スタイルになっていきました」

実践的な英語力のアップと、大学入試に対応した指導の両立を目指す

今回の授業は、グローバル科3学年の理系クラスでの学校設定科目「英語超人Ⅲ」で、「Lesson7」の全7時間中の1時間目となる。この科目は、英語の4技能を高めることを目的として、グローバル科の1〜3学年で設定されている。

教科書の内容は、元手の5ドルで2時間以内にとだけ稼げるかを考え、実行するという、アメリカ・スタンフォード大学で実際に出され

た課題についてのエッセーだ。今回の授業では、課題のルールが記された第1段落を読み、黙読やペアワークを通じて文法や慣用句、機能語などについて学ぶ。その後、ディスカッションを通じてその課題について考える。

3年次2学期の授業であるため、森先生は大学入試を意識した指導も行う。今回は、本文のプリントの空所について、「なぜ、σが入り、Forが適切ではないのか」をペアで話し合わせた。

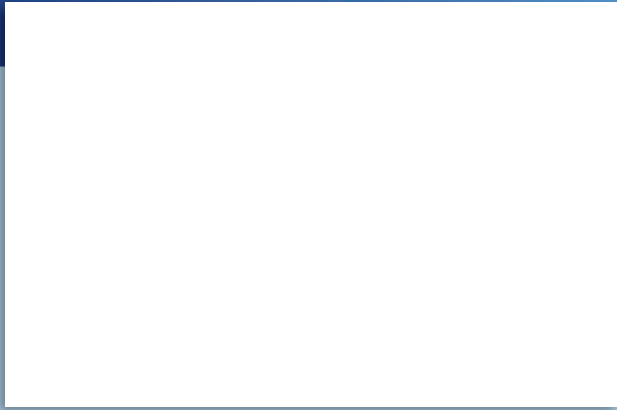
「日常会話であれば気にしないようなことでも、生徒の希望進路の実現に向け、大学入試で求められる文法の正確さの指導は必要です。実践的な英語力と入試に対応できる力の双方を伸ばす授業を目指しています」

思考の活性化・深化への配慮

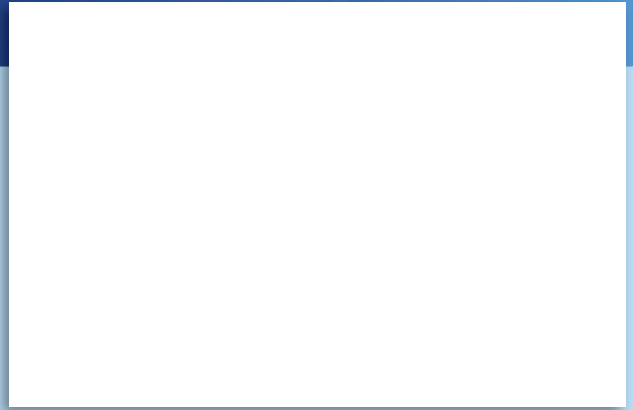
本当に話したいと思えるテーマだからこそ、主体的になる

森先生は、まずは生徒に自分の考えを持つように指導することを重視している。例えば、ペアやグループでのワーク前には1人で考える時間を設け、難しいテーマであれば、逆にペアやグループで他者の意見を聞いてから、自分の考えを整理する時間を設けている。自分の意見と、教科書本文や他者の意見を比較・検討させることで、より深い思考を促すためだ。

また、1人で考える時間は短くし、5分間の課題なら3分間程度でストップをかける。時間



本文にあるスタンフォード大学の課題について考える。まずは1人で2分間考えた後、ペアで10分間話し合って互いのアイデアを共有しながら、各自、3分間程度のスピーチにまとめる。その後、先生の指名を受けた生徒が英語で発表。「得意なマジックで大道芸を披露する」などのアイデアが出た。最後に次時の内容を伝えて授業は終わった。



本文が書いてあるプリントを使い、ペアで音読する。テンポよく進むよう1文ごとに交代する。プリントの本文には空所があり、それを自分で埋めながら読み進める。その後、on や for などの機能語が、なぜその空所に入るのかなどをペアで理由を述べ合い、語彙や慣用句への理解を深める。先生は机間巡視で取り組み状況を観察し、質問があれば全体説明を行う。



本文のプリントは Level 0～2 の3段階。Level 0 は第1段落の全文が掲載しており、Level 1・2 は重要な単語や慣用句の空所が増える。段階的に理解を深められる構成としている。

を長く取り過ぎると、間延びする可能性があるからだ。「森先生は短めに切り上げるから早く考えないといけない」といった感覚を持たせ、生徒の脳に負荷をかけるのである。

森先生がもう1つ重視しているのは、課題設定の工夫だ。

「誰かと話したいと思う課題でなければ、積極的に英語を使おうという気持ちにはなりません。生徒が興味・関心を持つトピックになっているか、もっと学びたいと思える内容になっているかは、常に意識しています」

今回の授業では、生徒自身の宿題や課題の経験を思い出させた上で、「実は、スタンフォード大学ではこんなに面白い課題があつて……」という形で教科書のリーディングに入った。また、

場づくりへの配慮

必ず挨拶をし、敬意を払うことで場を和ませ、信頼感を高める

グローバル科は1学年2クラスのため、毎年クラス替えがあつても生徒同士の親密度は高い。3週間ごとに席替えをして、ペアワークの相手が替わるようにしているが、相手が誰であつても自然に活動に取り組む。

そうした中でも、森先生が大切にしているのが挨拶だ。生徒同士が向き合い、活動前は「よろしく願います」、終了時は「ありがとうございますございました」と声をかけ合う。一緒に活動に取

授業の半ばには「スタンフォード大学の学生と勝負しよう」と呼びかけ、後半の活動に対する意識づけを図った。最後にアウトプット活動があることで、適度な緊張感が生まれ、生徒は集中して黙読やペアワークに取り組む。

今回は、課題のルールが書かれた第1段落だけを読み、スタンフォード大学の学生からどのようなアイデアが出たのかは2時間目以降に持ち越した。アメリカの一流大学の学生のアイデアが自分たちのアイデアと比べてどうなのかと、期待を持たせて授業を終わらせることで、「先を知りたい」「読みたいから授業を受ける」という意識を引き出していく。そうした授業設計としているため、森先生の授業では原則予習は必要なく、授業で教科書を初見で読ませている。

授業デザインシート

【教科・科目】英語・英語超人Ⅲ(学校設定科目)

【設定時数】7時間中の1時間目

【分野・単元】Lesson7

【本時全体の目標】本文を読む前に自分の意見を構築することで、本文の読みにつなげる。

【テーマ・作品】「A Class from Stanford University」

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
Warming up (Guessing Game)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の言葉で説明する力 簡単な言葉に言い換えたり、具体化したりする力 Keywordの提示で本文の内容を予想する力 	<ul style="list-style-type: none"> 表現力 主体性 	<ul style="list-style-type: none"> 提示された単語を英語でほかの言葉に言い換え、ペアの相手に伝える。 生徒の表現を確認し、適切でない表現があれば、指摘したり、クラス全体で考えたりする。 新出単語の一部を導入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の答えよりもワンランク上の答え方を提示する。 全体で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の調子を見極め、生徒が単語で発話している場合、文にして返す。
Questions Oral Interaction	<ul style="list-style-type: none"> 自分の過去を振り返り、表現する力 自分の過去の気持ちを英語で表現する力 人の思いを理解する力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 表現力 主体性 	<ul style="list-style-type: none"> 本文と関連し、かつ生徒にとって身近な内容の発問をすることで、自己表現を促す。 生徒が答えやすいよう、まず教師が自分の経験を話す。 興味深い内容について共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> Warming upで提示した単語と関連させる。 教師が具体例を示しながら、生徒に考えるきっかけと時間を設ける。 ペア・全体で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が英語で表現できない部分は、日本語で話してもよしとする。ただし、教師やペアがその日本語を英語で言い換える。
Reading	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を読み取る力 情報を整理する力 	<ul style="list-style-type: none"> 技能 主体性 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の発問の答えを予想させてから本文を読み、必要な情報を探させる(今回は内容が分かりやすいため、ノートにメモはさせない)。 ペアになって、日本語で概要を伝え合い、確認する。 確認した内容が合っていたか、教師の作成したスライドで、全員で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発問の答えを予想してから本文を読ませることで、情報をどのように整理するのか見通しを持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 読む時間を少し短めに設定し、集中力を高めさせる。
Read aloud	<ul style="list-style-type: none"> 音読しながら語彙・文法・文構造・内容の理解を深める力 英語を英語で理解する力 疑問点を調べたり、他者に相談できたりする力 	<ul style="list-style-type: none"> 主体性 協働性 	<ul style="list-style-type: none"> 概要を把握した本文について、音読を重ねて、語彙・文法・内容の理解を深めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> できる限り指示を少なくする。 できる限り机間巡視をして個別に指導を行う。 その際に多くの生徒がつまづいたポイントは全体で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語の得意な生徒が自分の音読が終わって、指示待ちにならないように音読活動の見通しを持たせる。
Discussion	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を自分の言葉で表現する力 本文の続きの内容を予想する力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 表現力 主体性 多様性 	<ul style="list-style-type: none"> 発問に対するアイデアをペアで話し合う。 メモをさせ、様々なアイデアと比較しやすくさせる。 最もよいアイデアを選び、ペアで共有する。 よいアイデアを全体で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 次時以降で扱う本文にはスタンフォード大学の学生が実際に出したアイデアが書かれている。それよりもよいアイデアを出せるか、競争心を持たせられるよう、生徒に語りかける。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本語で考えると思考が複雑になるので、生徒が表現しにくい可能性がある。授業の始めのWarming upと同じで簡単に言い換えることを意識させる。

*森先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

成果と課題

ネイティブ・スピーカー相手に堂々と英語を使う生徒たち

り組む仲間、頑張り合った仲間に対して、敬意やねぎらいを示すことで、場が和み、信頼感が高まるという。

そのような授業改善の最大の成果は、大半の生徒が積極的に英語で自分を表現できるようになったことだ。例えば、自分の思い出の品を紹介するという、ALTと1対1のスピーキングテストで、生徒は堂々と自分の思いを語っていたという。

「以前は、筆記試験の出来はよくても、ALTとうまく話せないという生徒が少なくありませんでした。今もすべての生徒が日常会話を流暢に話せるとまではいきませんが、一生懸命伝えようとしている生徒の姿勢を誇らしく思います」

課題は、教科全体で実践的な英語力を向上させる指導の質をさらに高めることである。

「3学年で教科書を統一したことで、学年を超えて指導法や教材について共有する時間が増えました。今後も、教師同士で語り合う場をさらに設けたいと考えています。本校には、ほかにも素晴らしい実践を行っている先生方がいます。教科や学年を超えて指導ノウハウを共有し、英語科全体でも互いを刺激し合い、指導力のさらなる向上を図っていききたいと思います」